



シーズ名

氏名・所属・役職

山祐嗣・文学研究院・教授

<概要>

人間が行なう推論が、進化的および文化的にどのような意味で適応的なのかを研究している。最近、日本人を含めた東洋人が、規則に基づいた推論を行ないにくいこと、その本質は、素朴弁証法にあることなどを実証し、それがどのような意味で東洋の文化に適応的なのかを論じている。そして、日本人が論理的ではないという通説に反論をしている。また、東洋人は、西洋人と比較して、背景的に共有している情報(コンテキスト)により依存したコミュニケーションを行っていると考えられている。図は、コンテキストを共有しないコミュニケーションの失敗例である。そして、これが、東洋人が、コンテキストを共有しにくい異文化コミュニケーションに慣れてない可能性があることを指摘している。



<アピールポイント>

理論面では、西洋人と東洋人の思考の違いがどんな点で文化適応しているかという点で学界に貢献している。東洋人の、暗黙の共有知識に頼る思考は、コミュニケーションスタイルにも現われていて、「よろしくお願いします」だけで事足りるコミュニケーションがその代表である。グローバル化の中で、日本人をはじめとする東洋人が、西洋人とコミュニケーションをする上で、どのようなことが必要なのかというスキルを開発するプログラム等に貢献できる。

<利用・用途・応用分野>

日本人をはじめとする東洋人が、西洋人とコミュニケーションをする上で、どのようなことが必要なのかというスキルを開発するプログラム等に貢献できる。具体的には、マインドフルコミュニケーションと呼ばれる、暗黙の共有知識を意識することを重視するプログラムである。

<関連する知的財産権>

とくになし。

<関連するURL>

とくになし。

<他分野に求めるニーズ>

コンテキストによる文化差は、異文化が会う状況でコンテキストに依存しないコミュニケーションスタイルが規範とされやすくなると説明される。歴史学、文化人類学などからの知見と合わせて、総合的な人文科学理論に発展することが期待できる。

キーワード

推論、比較文化研究、生態学的適応論、素朴弁証法、コミュニケーション



シーズ名

ドイツ教育経営学

氏名・所属・役職

辻野けんま・文学研究院・准教授

<概要>

学校経営と教育行政に関心をもちながら、主にドイツを対象に研究しています。今日のドイツの学校教育はたとえば、授業は午前中まで、宿題を出すことは禁止(制限)、放課後の部活動はなし、長期休暇中の出勤もなし、・・・と日本のそれとはかなり異なっています。学校を「授業」の専門機関と定義して、<学校の限界>を明示しその専門化が図られてきました。結果、学校「以外」の社会教育や家庭教育といった機会も繁栄してきました。

今日、日本でも膨張した学校の役割の適性が焦眉の課題となっています。しかし、長らく学校教育が社会教育や家庭教育に比して重視されてきた背景から、それを適正化することの難しさに直面しています。人間と教育の関係を、生涯学び生きる生涯学習の観点からとらえ直すことで、学校などを通じた<制度的な学び>と人が自らふれる<非制度的な学び>のバランスを大切にす社会を探究したいと考えています。



趣味、遊び、交友、恋愛、読書、メディア、インターネット、偶然の学び etc.

<アピールポイント>

- ・ 外国との共同研究や比較研究 → 看過されがちな自文化の特質を明らかにできる。

<利用・用途・応用分野>

- ・ 学校改善、教育行政への政策提言、地域社会と学校の連携、など。

<関連するURL>


<https://researchmap.jp/read0108193/>

<他分野に求めるニーズ>

教育というテーマは、様々なアクターの固有利害が解消され協力がしやすい領域だと考えます。大人が頑張り過ぎて子どもが委縮する<教育の権力性>も配慮しつつ協力を進めたいと思います。

キーワード

教育経営学、ドイツの学校経営、教育行政の専門的責任

	シーズ名	中国現代文学、中国現代演劇
	氏名・所属・役職	文学研究科・教授・松浦恆雄
<p><概要></p> <p>20世紀以降の中国現代文学、演劇について、文献を中心とした研究を行っている。</p> <p>現代文学では、廢名、穆旦、汪曾祺といった、これまで文学史の主流として認められていなかった文学者たちの重要性を再評価している。</p> <p>現代演劇では、近年、伝統演劇の観客のために編まれた脚本集、劇場で配布、販売される番付、ラジオの伝統演劇の番組を聞くときにリスナーが見る歌詞の冊子などを収集、整理、分析している。これらを通して、演劇文化の形成されてゆく過程を明らかにしている。</p>		
<p><アピールポイント></p> <p>中国の伝統演劇研究において、脚本集、番付、歌詞の冊子などを系統的に整理、分析する研究は、中国においてもほとんど存在しない。中国近代社会における演劇文化の重要性を明らかにしている。</p>		
<p><利用・用途・応用分野></p>		
<p><関連する知的財産権></p>		
<p><関連するURL></p>		
<p><他分野に求めるニーズ></p>		
キーワード	中国 現代文学 現代演劇	



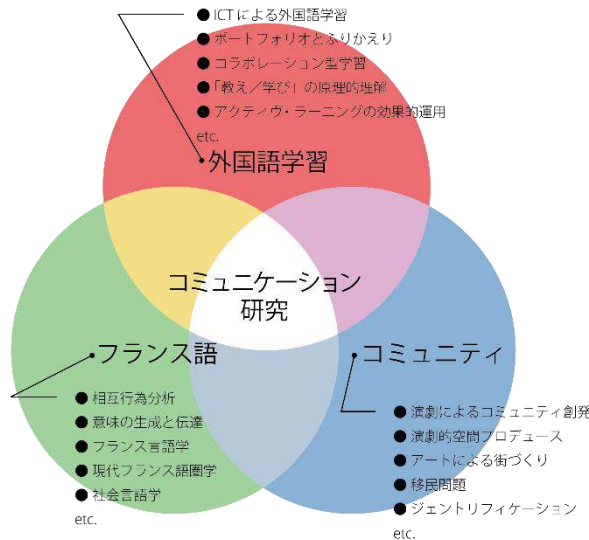
シーズ名

コミュニケーション、コラボレーション、コミュニティ創発

氏名・所属・役職

福島 祥行・大学院文学研究科・教授

Communication,
Collaboration,
Communauté



<概要>

わたしの研究は、おおきく分けると、①コミュニケーション研究、②外国語学習にかんする諸研究、③ひとびとの交流の場の生成、④現代フランス語圏研究、⑤言語学のいつつになります。

①・⑤はひとびとの交流場面(相互行為=コミュニケーション)を動画に撮り、そこにあらわれる音声、動作、視線などを、0.1秒単位で詳細に分析することにより、ひとびとのコミュニケーションの詳細をあきらかにするものです(マイクロ分析)。そのけっか、ひとびとは、ひとりひとりがかってに発話しているのではなく、全員のコラボレーションにより、ひとつの発話をみんなでつくりあげていることがわかりました。

②は、情報機器やネットワークをもちいた ITC (Information and Communication Technology 情報通信技術)による外国語教育のほか、ラーニング・ポートフォリオやグループ・ワークによるアクティヴ・ラーニングの研究を、やはり相互行為・コミュニケーションの観点から研究「学び」とはそもそもいかなるものなのかを研究しました。そのけっか、ひとびとは、社会的なコミュニケーションの場で学んでいることがわかりました。また、欧州評議会の言語学習規範である「複言語・複文化主義」の立場から、言語学習のありかたについて提言しています。

③は、「コミュニケーション研究」すなわち「ひとびとはどのようにして通じあえるのか」ということを解き明かす研究から派生したものです。具体的には、ひとびとがグループで活動するさいのさまざまな問題(協働、共感、共通理解、リーダーシップ、モチベーション)を、いかに解決するかについて研究しています。また、地域のひとびととともに演劇をつくりあげるなかで、あらたな人間関係=コミュニティがたちあがってくるさまを研究しています。このことは、アートやイベントによる街づくりにも応用されています。

④は、世界各地にちらばるフランス語圏の社会について、複言語・複文化主義、社会構築主義の立場から研究をおこなっています。とりわけ、さまざまなひとびとの交流(コミュニケーション)によって生じる移民問題やジェントリフィケーションに関心をもっています。

<アピールポイント><利用・用途・応用分野>

①・③コミュニケーションは個人ががんばっておこなうものではなく、コミュニケーションの相手や環境などとの相互行為(インタラクション)であるという視点から、より効果的な広報戦略や、コミュニティのたちあげと継続、人事の研修、司会・リーダー研修、コミュニケーション・ワークショップなどに応用ができます。

②言語学習について、学びの原理からとらえることで、これまでたんなるテクニックしか論じてこなかった外国語学習を、自律的・持続的なものとすることができます。また、ラーニング・ポートフォリオなど、他分野の学習にも応用可能なアイテムの開発が可能です。

④現代フランス語圏についての知見と、コミュニケーションに起因する社会問題への考察から、コミュニティや街づくりについての提言や監修がおこなえます。

<関連するURL>

<http://chat-noir.com/>

キーワード

コミュニケーション、相互行為分析、アクティヴ・ラーニング、協働(コラボレーション)、外国語学習、ICT、ポートフォリオ、コミュニティ、演劇、街づくり、つたえることとつたわること